

デング熱・チクングニヤ熱など媒介蚊対策における宗教関係者の意識調査

勝田吉彰 (関西福祉大学社会福祉学部社会福祉学研究科長/教授)

要約

→ デング熱・チクングニヤ熱などの媒介蚊対策において、神社仏閣などの宗教施設内には蚊が発生し棲息できる場所が多く、その対策が重要である。今回、多宗派の宗教関係者を対象に、媒介蚊対策を行う上での困難や必要な支援についてアンケート調査を行った。

その結果、宗教施設敷地内には媒介蚊が棲息する条件が様々に存在する一方、媒介蚊対策には負担が多く困難を伴うことがわかった。古都保存法による指定地域や隣接公営墓地など、宗教関係者が手を出しにくい場所もあり、公的支援が必要と考えられた。また、不殺生戒など教義との葛藤もあるように見受けられた。

また、敷地内の清掃に信徒やボランティアといった外部の一般人が従事する点や、聖職者による説法の中で感染症の話題が既に一定割合語られ、リスクコミュニケーション的に作用していることから、宗教関係者への情報提供が必要である。

1. 垣間みえた媒介蚊対策に対する

宗教家の高い関心

2014年夏、東京・代々木公園に端を発したデング熱国内感染事例は大きく報道され、広く世間一般の関心を集めた。現場の代々木公園を航空写真で見ると、明治神宮や神社本庁と連続した森になっており、媒介蚊が公園内で発生したものなのか宗教施設敷地内で発生したものなのか区別することは困難である。しかしながら、報道の映像は東京都の施設である代々木公園に集中し、公園の閉鎖措置や薬剤散布シーン、調査シーンを放映するばかりであり、隣接する宗教施設敷地に対する世間一般の関心の低さを実感した。

筆者は同時期に、仏教系・神道系・新興系を含めた多宗派が所属する宗派横断的な勉強会(国際宗教同志会)¹⁾で講演の機会を得たが、その際に、宗教関係者が媒介蚊対策に対する高い関心を共有していることを実感した。神社仏閣などの宗教施設は豊富な植生や水のたまりやすい場所が多く、具体策や近隣住民との関係まで含めた悩みが語られた。

一方で、一部の僧職・神職(以下、まとめて聖職者と記述)が感染症に関して筆者が想定していた以上の正確な知識を持ち、説法の場面で感染症の話題が語られ、リスクコミュニケーション的に作用していることもわかった。そこで、媒介蚊対策を行う上での困難や必要な支援、利用可能性などを明らかにすることを目的として、筆者が多宗派を対象に意識調査を行ったので報告する。

表1 国際宗教同志会所属施設への質問項目

(1) 昨年夏に「デング熱国内感染」の報道が流れましたが、どの程度関心をもたれたでしょうか(5段階)
(2) 貴施設についてお尋ねします。施設敷地内に、水のたまる場所がありますでしょうか。該当するものに○をつけて下さい(複数回答可) 手水・御手洗・庭園・側溝・防火用水・その他()
(3) 貴施設の敷地面積のうち、草地・灌木・森林の占める割合はどれほどでしょうか 約()%位
(4) 敷地内の清掃はどなたが実施されておられますでしょうか(複数回答可) 聖職者・施設職員・業者に外注・ボランティア(信徒を含む)
(5) 蚊対策として殺虫剤などで大量に殺生することに教義上の抵抗はあるでしょうか
(6) 仮に施設敷地内のすべてで蚊の駆除をしなければならぬと仮定すると、負担感はあるでしょうか(4段階)
(7) 蚊対策について、近隣住民との関連で意識することはあるでしょうか(有無2択)
(8) 貴施設では、無宿者(ホームレスなど)への宿泊提供を行っておられるでしょうか(有無2択)
(9) 貴施設では、炊き出しなど、無宿者(ホームレスなど)が一時的に集まることになる活動を行っておられるでしょうか(有無2択)
(10) 貴施設では、海外における布教活動・ボランティア活動・遺骨収集などを行っておられるでしょうか(有無2択, 有の場合は詳細記入)
(11) これまでの説法などの中で、一般報道を含めて感染症の話題を話されたことがあるでしょうか(有無2択, 有の場合、インフルエンザ・エボラ・デング・食中毒・一般衛生・その他から選択)
(12) 求められる公的支援について(自由記入)

2. 方法と結果

国際宗教同志会に所属する53施設を対象に郵送にてアンケート調査を行った。回答者および施設名は無記名で行った。回収数25、回収率47%で、回収された施設内訳は、寺院56%、神社28%、教会16%であった。施設への質問項目を表1に示す。

デング熱報道に対する関心は、非常に高かった(18%)、高かった(39%)、どちらとも言えない(35%)、あまり関心なかった(4%)、まったく関心なかった(4%)となり、「非常に高かった」「高かった」合わせて57%と高い関心が示された。施設敷地内で水のたまる場所は、1施設を除くすべてが「ある」と回答。その内訳を図1に示す。

敷地面積に占める草地・灌木・森林の割合は、50%以上(23%)、40%台(4%)、30%台(12%)、20%台(23%)、10%台(23%)、不明(15%)で、「お堂と門以外のすべて」「周囲が竹林(市有・古都保存法指定地域)」「観光地で竹林の人气が高いので影響大」と書き加えられた回答もあった。敷地内の清掃実施者を図2に示す。信徒・ボランティアといった外部の一般人が関与する施設も11施設あった。

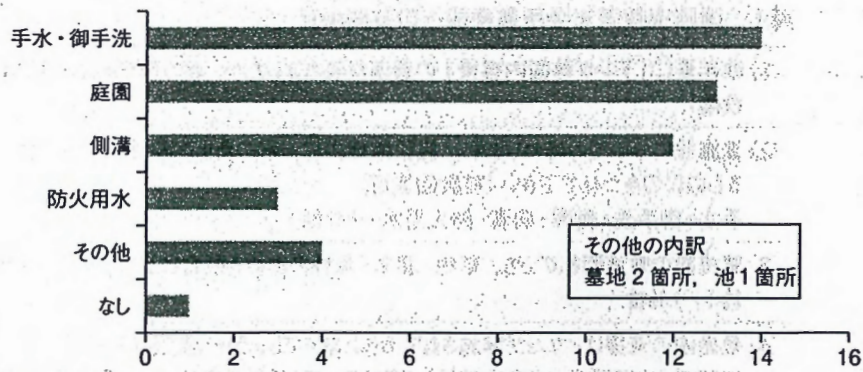


図1 施設敷地内で水のたまる場所(複数回答可)

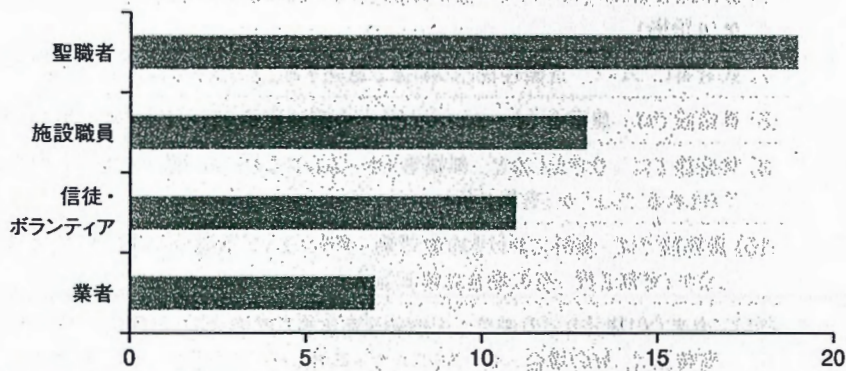


図2 敷地内の清掃実施者(複数回答可)

媒介蚊を根絶することに対しては、不可能(36%)、かなり負担(36%)、どちらとも言えない(16%)、負担ではない(12%)となり、「不可能」「かなり負担」合わせて72%と高率であった。近隣住民との関連では、意識する(24%)、意識しない(72%)、無記入(4%)となった。蚊の殺生に対する教義上の抵抗感を図3に示す。非常に抵抗があるとする回答はなかったが、抵抗がある(28%)が、ない(28%)と同数で拮抗していた。無宿者(ホームレスなど)への宿泊提供を実施しているのは1施設のみで、無宿者が一時的に集まる活動を実施している施設は災害時を除きまったくなかった。

海外における布教・ボランティア・遺骨収集などの活動は、行っている(20%)、行っていない(80%)となり、行っている場合の行き先は、フィリピン、米国、グアム、サイパン、ソロモン諸島、南アジアとの記入があった。

説法などで感染症の話題を語ったことが、ある(44%)、ない(56%)で、具体的に重症急性呼吸器症候群(severe acute respiratory syndrome:SARS)、エボラウイルス病(Ebola virus disease:EVD)、デング熱、O-157感染症、食中毒一般、一般衛生が挙げられた。

求められる公的支援について、自由記入欄に記入された内容を表2に示す。

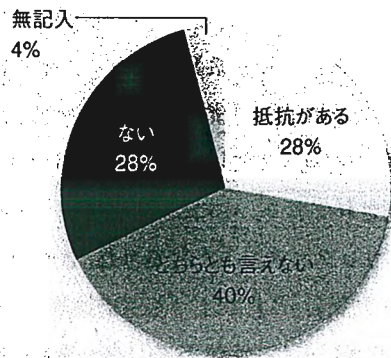


図3 殺虫剤などで大量に蚊を殺生することに対する教義上の抵抗感

表2 自由記入欄に書かれた内容 (注以外原文のまま)

- ▶ 森林における落葉の対策
- ▶ 竹林を所有しているため蚊は夏場に多いが自然現象としてとらえ上記のような観点(注:媒介蚊対策という視点)で考えたことはない
- ▶ 定期的な駆除作業を公的支援で
- ▶ 公的機関による駆除,もしくは駆除費用の公的負担
- ▶ 隣接している公営墓地が古く花を供える水に蚊が大量発生している。寺の中の墓は対策(ステンレス筒に替える,水抜き穴をつくる)ができるが,公営墓地はまったくの手つかずである
- ▶ 徹底した駆除法があれば広報願いたい
- ▶ お墓の水鉢や花立ては使用しにくい
- ▶ 公園等では害虫駆除をして頂ければと思う。寺院や神社等でも,駆除できる範囲でして頂ければ有難い
- ▶ 環境に配慮した殺虫剤の配布
- ▶ 駆除は公的機関が行うべきと考える
- ▶ 空港での入国時の検疫の徹底と国民への予防接種の拡充を公的セクターに希望します

3. 見えてきた宗教施設の媒介蚊対策に欠かせない視点

1 宗教施設の媒介蚊対策に対する公的支援の可能性

今回の意識調査を通じて、デング熱および同種の蚊によって媒介されるチクングニヤ熱の媒介蚊対策について宗派を問わず強い関心が示され、これは筆者が宗教関係者を聴衆とする講演会で得た実感と一致した。施設内には宗派を問わず、蚊の培地となる場は多種存在することがわかった。Spiegelら²⁾はキューバにおいて宗教儀式に用いられる花器のリスクを指摘し、Thammapaloら³⁾はタイ・プーケット島において、仏教徒家庭ではイスラム教徒家庭に比べて水のたまる場所が多く媒介蚊の培地となりやすい点を報告しているが、

今回、日本でも、仏教寺院では併設する墓地など水のたまりやすい場所が明らかになった。

さらに、御手洗(みたらい)のように仏教系・神道系共通の水のたまる場所も存在する上、竹藪からの蚊の発生も指摘された。その中には古都保存法指定地域のため宗教施設側からは手の出せない場合もある。媒介蚊を根絶することに対しては「不可能」「かなり負担」合わせて72%という高率で困難が表明されており、中には「竹林だけで2000坪」と欄外に書き加えられた回答まであった。パブリックコメントが募集され、2015年4月に告示された「蚊媒介感染症に関する特定感染症予防指針」⁴⁾上では、「都道府県等は、蚊媒介感染症の感染が拡大する蓋然性に関する評価の結果に応じ、法第28条に基づき施設等の管理者等や市町村への有効かつ適切な蚊の駆除の指示を行うとともに……」とあるが、現実的に駆除を宗教施設管理者のみに求めるのは困難であり、当初より行政の支援が必要なことが明らかになった。

2 宗教施設への協力要請にあたり配慮すべきこと

2014年の代々木公園における流行では、公園内の灌木に大量の殺虫剤を噴霧するシーンが繰り返し報道された。このように蚊を大量に殺生することに対し、28%が「抵抗がある」と回答している。たとえば、仏教の教義には五戒(不殺生戒・不偷盗戒・不邪淫戒・不妄語戒・不飲酒戒)があり、その中の不殺生戒では、むやみに生物を殺すことは教義上禁じられている。すなわち、殺虫剤の散布により蚊を大量に殺生することは、彼らの信念の中で葛藤を強いるものであるという視点を忘れてはならない。「不可能」とする回答はなく、最終的には協力が得られると思われるものの、宗教施設への立場に配慮した丁寧な協力要請が必要であるという点を指摘しておきたい。

宗教施設はその性質上、救貧活動の場となることがある。代々木公園では長時間利用者を介しての感染拡大が指摘されているが、救貧活動の利用者には公園の長時間利用者と重なる面があり、宿泊提供や炊き出しなどで集合する場面でのリスクも推測したが、それは僅少であることがわかった。

宗教関係者の海外渡航によるリスクについても指摘したい。Sharpら⁵⁾は、ハイチで布教活動を行った米国宣教師の集団感染事例を報告しているが、今回の調査でも、フィリピンやソロモン諸島などデング熱・チクングニヤ熱の流行国に渡航している実態が明らかになった。第二次世界大戦戦没者の遺骨収集作業ではジャングルなどのハイリスク地帯に入ることも多く、この点からも宗教関係者に対する情報提供が重要と考えられる。

3 リスクコミュニケーションの可能性

最後に、宗教関係者に対する情報提供の重要性を論じたい。今回の調査で44%と半数近くが、これまでの説法の中で感染症の話題を取り上げたことがあると回答しており、既に一定の割合で感染症の話題が信徒に向かって語られていることがわかった。宗教関係者と

信徒という関係性を考えると、これは熱心に聴講されていると考えられ、この「今既に存在し動いている仕組み」をリスクコミュニケーションの手段として活用することはコストがかからず経済的にも合理性を持つものと考えられる。宗教者に対して流行中の(あるいは話題となっている)感染症の情報提供は有用であろう。

さらに、敷地内の清掃実施者としては、宗教関係者はもとより、信徒・ボランティアなど市井の一般人が関与している実態が明らかとなった。その感染予防の観点からも宗教関係者に対して正しい知識が提供され普及することはきわめて重要である。2014年のデング熱国内発生にあたっては、国立感染症研究所の高崎ら⁶⁾が『月刊住職』誌の特集インタビューを通じ、仏教系の幅広い宗派にわたり詳細な情報提供を行い、前述の国際宗教同志会¹⁾にて筆者が広汎な宗教関係者を対象に講演を行った。今後も、さらに広範囲に宗教関係者に情報を届ける仕組みを構築することにより得られるメリットは大きいと言えよう。たとえば、労働安全衛生法に基づき、2015年12月から実施されるストレスチェックで、独立行政法人労働者健康福祉機構にて、伝達講習(実施者に対する講習を行う講師に対する講習)が行われている例などが参考になろう。

○

媒介蚊対策における宗教関係者の意識調査を行った結果、宗教施設内には媒介蚊が棲息する条件が様々に存在する一方、その対策には負担や困難が伴い、公的支援が必要と考えられる。また、聖職者による説法の中で感染症の話題が既に一定割合語られており、これをリスクコミュニケーションの手段として活用する可能性について論じた。

注：文中で「聖職者」は僧職・神職の意味で、また、「宗教関係者」は聖職者+宗教施設職員の意味で用いた。

【謝辞】

本調査にあたり、国際宗教同志会加盟の下記宗派の皆様にお世話になりました。

金光教・浄土真宗・真言宗・神習教・神声天眼学会・神道・曹溪宗・曹洞宗・天台宗・天理教・融通念佛宗・立正佼成会・臨済宗(五十音順)

感謝いたします。合掌。

文献

- 1) 国際宗教同志会。
[<http://www.relnet.co.jp/kokusyu/>]
- 2) Spiegel JM, et al: Trop Med Int Health. 2007;12(4): 503-10.
- 3) Thammapalo S, et al: Southeast Asian J Trop Med Public Health. 2005;36(2): 426-33.
- 4) 蚊媒介感染症に関する特定感染症予防指針。平成27年4月28日 厚生労働省告示第260号。
- 5) Sharp TM, et al: Am J Trop Med Hyg. 2012;86(1): 16-22.
- 6) ウイルスや毒を持つ生物から寺を護る。月刊住職。2014;484(11): 80-9.